

第5回多摩川流域歴史セミナー

『関戸合戦と関戸の地域性』

～午後の部：講演 橋場万里子 氏～

－開催報告－



『多摩川50景』 大栗川合流点

平成29年6月10日（土）
多摩川流域懇談会

講演『関戸合戦と関戸の地域性』

講演：橋場 万里子 氏

■関戸合戦の史実と伝承

(1) 観音寺の供養

聖蹟桜ヶ丘の駅から旧鎌倉街道沿いを市役所に向かっておりていく途中に観音寺というお寺があります。このお寺では毎年5月16日と毎月16日に供養を行っています。何の供養をしているかという、一つは、日清・日露戦争、大東亜戦争で亡くなった方たち、もう一つは関戸合戦で亡くなった方たちの供養です。本日のテーマは関戸合戦。元弘3年(1333)の5月16日に、新田義貞軍が鎌倉幕府軍を分倍河原・関戸で破った戦いのことです。

(2) 太平記

関戸合戦を知る手がかりとして、『太平記』という軍記物語があります。後醍醐天皇は自分の子孫を天皇にすることが否定されたことなどへの不満から、鎌倉幕府を滅ぼしたいと考えます。そこで、足利尊氏や新田義貞などの武将に呼びかけた結果、関東では新田義貞が挙兵し、最終的にはこの挙兵がもとになって鎌倉幕府を滅ぼしました。この、新田義貞が鎌倉幕府を滅亡させる過程で起きた戦が分倍河原・関戸合戦です。

『太平記』を見てみると、敗走していく北条泰家ほうじょうやすいえが関戸のあたりで討たれそうになるものの、家臣の横溝八郎よこみぞはちろうや安保入道あほにゅうどう父子の捨て身の奮戦に守られて泰家は鎌倉まで逃れたという具体的な話が載っています。関戸の合戦の話は別の軍記物語の『梅松論』にも出てきます。

(3) 合戦が起きた当時の史料

物語が現実の出来事かを確かめるために、当時の同時代史料を確認します。

史料としては、元弘3年に作成された「後藤信明軍忠状」という軍忠状(=武士が自己の軍功を大将に上申して承認を受け、武勲の証拠とした文書)があります。これには5月15日に分倍河原の合戦に加わり、軍功をあげたことが記されています。別の「大

河戸隆行軍忠状」には5月16日に分倍河原に行ったことが記されています。その他にも同様の内容を示唆する古文書や板碑がありますが、これらの同時代の史料により、5月15、16日に実際に分倍河原で戦があったことがわかるわけです。

今度は人物に焦点をあてます。鎌倉・室町幕府の始の記録である『御的日記』おまとにつきという日記を確認すると、横溝八郎高貞という人物が弓を射って10本中9本を的中させていることが記されています。ここから、横溝八郎という弓の名手が実在したことが確認できます。

今回のタイトルは関戸合戦としていますが、一般に有名なのは分倍河原合戦という名称です。現在見られる史料を整理した範囲では、分倍河原と書かれているものは新田方の史料が多く、幕府方の史料では関戸と書かれていることから、ひょっとすると両軍の陣地が置かれた場所も影響しているのかなと想像しています。

(4) 関戸合戦の伝承地



横溝八郎の墓 (八郎塚)

関戸に残る伝承地としては、聖蹟桜ヶ丘駅のすぐそばに旗巻塚はたまきづかという塚があったことが伝えられています。これは北条軍が旗を巻いて退却した場所だとされます。それ以外にもかつて琴平社ことひらしやがあった天守台てんしゅうだいと呼ばれる場所や横溝八郎の墓である八郎塚、関戸の古戦場跡、無縁仏、安保入道の墓という場所も残されています。

冒頭に供養の話をしました。5月15日の供養で



は、お経をあげた後に、安保入道の墓、無縁仏、横溝八郎の墓に卒塔婆を立てて、お参りをしています。

『太平記』には関戸合戦の次の日に関戸で新田義貞が1日逗留していることが書かれています。先ほど天守台といった場所は「城山」とも呼ばれており、義貞がとどまった場所なのではないかと地元には伝わっています。

■なぜ、関戸は戦場になるのか ～関戸の地域性～

(1) 関戸が戦場になった事例

関戸は先述の合戦以外にも様々な戦の戦場、通過点、陣地等になっています。

例えば、文和元年（1352）の武蔵野合戦では新田義貞の息子、^{よしおき}義興が足利尊氏を攻めましたが、このとき、関戸に陣が置かれています。同時代の「水野致秋軍忠状」には、やはり関戸に馳せ参じたことが書かれており、本当に陣が置かれていたことが確認できます。

他にも応永23年（1416）に起きた^{うえすぎげんしゅう}上杉禅秀の乱に関する資料で「関戸御陣」という記載があったり、^{やまのうちうえすぎ}明応3年（1494）の山内上杉氏と^{おうぎがやうえすぎ}扇谷上杉氏の争いで「関戸要害」が陥落したことが記されています。

次に他の戦場との関わりを紹介します。高幡不動の本尊の像内で古文書が見つかり、この中にも関戸のことが書かれていました。この文章は暦応2年（1339）に常陸合戦に従軍した^{やまのうちつねゆき}山内経之という武将が家族に送った手紙ですが、その中には滞在費用の無心や馬具が不足しているから調達して欲しいといった内容が書かれています。経之は戦死し、その後、この文書は鎮魂のために高幡不動の本尊の中に納められたのだと思われます。この文書の宛名には、「関戸の観音堂の坊主へ」と書かれており、兵糧米やお金の支援を頼んでいたと考えられています。

(2) なぜ、関戸は戦場になるのか

① 関戸という地名

なぜ関戸は戦場になるのでしょうか。今回は関戸の地域的な特徴を考えていきます。

関戸の「関」というのは関所の関で、「戸」というのは港や津といった意味があります。この言葉に象徴されるように関戸は交通の要衝なのです。

② 地理的環境

地理的なものを見ても多摩丘陵の一番北に位置しており、^{むさしこくふ}武蔵国府（今の府中市）から多摩川を挟んで2～3キロ程度という距離、そして鎌倉街道沿いにある、多摩川の渡河点にあたる場所でしたので、交通上も政治上も非常に重要な場所であったと言えます。だから戦争のときには陣が置かれたのだと思います。

(3) 史料に見る「関戸」の特性

① 「関戸宿」として

史料上の所見としては、「関戸」という名称は『^{そが}曾我物語』の^{まなぼん}真名本で初めて登場します。この中では建久4年（1193）の故事として、頼朝が泊まった地として関戸の宿が出てきます。

② 歌の名所として

鎌倉時代末に成立した歌謡集『^{えんきまくしゅう}宴曲抄』という史料では、善光寺に行く行程を「^{そうが}早歌」という歌で詠んでおり、その中にも関戸が登場します。史料中には「霞の関と今ぞ知る、思ひきや我につれなき人をこひ、かく程袖を濡らすべしとは」と歌われ、「霞の関」と「恋ヶ窪」が題材になっています。その一節の前には小山田が歌われていることから、小山田～恋ヶ窪間に霞の関があったということが推察でき、関戸のことを霞の関と言っていることがわかります。



『関戸合戦』掲載図より
宴曲抄に詠まれた地名

③ 関所として

関戸には関所が置かれましたが、関所の手がかりは考古学的な史跡と戦国時代の史料の2つになります。

考古学的なものとしては、熊野神社の「霞ノ関南木戸柵跡」と呼ばれる場所があります。菊池山哉という人が昭和34年(1959)に発掘を行った時に柱穴が見つかり、これは鎌倉時代の関所の柵跡であろうと推測されました。ただ、発掘の時期が古いため、これが実際に鎌倉時代の遺構なのかどうかについてはよく分かっていません。

一方、天正14年(1586)の史料では、地元有力者である有山源衛門が関銭を徴収していたことが書かれています。ここから、少なくとも戦国時代には関所があったことがわかります。

■ 「関戸」の範囲

(1) 「関戸郷」の範囲を考える

① 関戸郷の村落数

次に、古文書に出てくる関戸という範囲はどこからどこまでなのかということを考えてみます。

実は多摩川南岸にも、広く合戦伝承が見られます。日野市との境に近い大栗川の宝蔵橋の近くに「どうよう塚」という塚があり、関戸合戦などで亡くなった雑兵たちを塚にしたものという伝承があったようです。また、日野市側の百草松連寺の由緒書では、分倍河原・関戸合戦で、焼き討ちにあって宝物を埋めたという伝承が残っています。さらに、多摩市東側の連光寺には相談山という山があり、新田義貞が軍議を行ったという伝承がここにも残っています。

このように鎌倉街道沿いだけではなく、東西にも伝承が広がっているわけです。実は関戸は江戸時代以前は「関戸郷」と呼ばれる広域地名でした。そこで、今度は「関戸郷」を検討する必要があると思います。

15世紀後半に書かれた鶴岡八幡宮の僧による『香蔵院琺瑯記録』という記録があり、この中では関戸は「五ヶ村」、「六ヶ村」と記載されています。

戦国時代の終わりぐらいの熊野那智神社の廊の坊の御師潮崎氏の檀那帳(檀家を書き上げた帳簿)にも「関戸七郷」という記載があり、関戸郷は何ヶ村かで成り立つ複合的な地名であることがわかります。

② 「関戸郷」の伝承

では、関戸郷はどの村とどの村なのでしょう。

江戸時代の関戸村の名主・相澤伴主という人は、関戸郷は関戸村、寺方村、貝取村、下落川村、百草村に分かれたと言っています。

一方、相澤伴主の在世と同じぐらいの時期に書かれた『新編武蔵風土記稿』では、関戸郷は関戸村と寺方村、貝取村に加え、中和田村、上和田村と表記されています。伝承だとこのあたりが関戸郷の候補地になりますが、伝承だけでは裏づけが少ないように感じます。



③ 関戸に含まれる村々

そこで史料から探してみます。『香蔵院珎祐記録』の中に出てくる関戸に含まれる村々の地名としては、「中河原」が多く出てきます。現在、中河原は多摩川の北岸にあります。その他に関戸の一部として「^{かのこじま}鹿子嶋」という地名もこの中に出てきています。

また、先述の有山源衛門に出された「松田憲秀印判状」の中にも「関戸郷中河原」と書いてあり、関戸郷の中に中河原が含まれたことが確認できます。ただし中河原が関戸に含まれることは、相澤伴主の史料や『新編武蔵風土記稿』には出てきません。

これらの史料からは、関戸の範囲は次の図のような形になってくると思われまます。鹿子嶋、中河原村、勝河村、乞田村、これは同時代史料上に関戸の一部としてはっきり出てきます。ただし、現存しているのは中河原と乞田ぐらいで、鹿子嶋というのは多摩川のどこかにあったとは思いますが、分かりません。勝河村は落川ではないかと多摩市史では推測していますが、その推測が当たっているかどうかは検証できていません。下図で括弧書きしているものは『新編武蔵風土記稿』等に出てくる名前です。



関戸の範囲

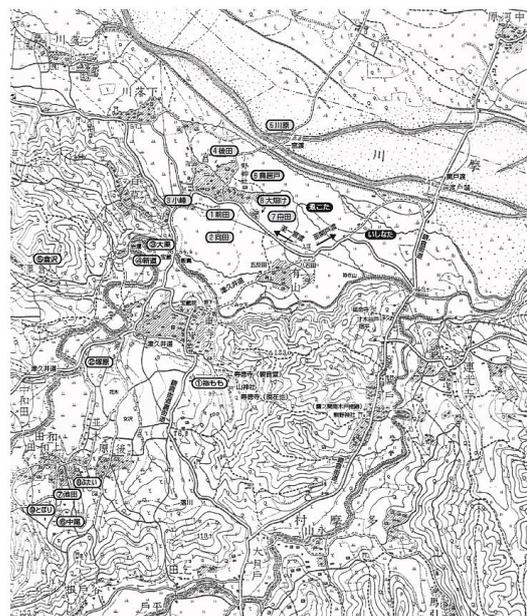
④ 検地帳から考える

そこで今度は検地帳のほうから考えてみます。文禄3年(1594)の「^{たさいぐんせきどごうおんなわうちょう}多西郡関戸郷御縄打帳」が国文

学研究資料館に残っており、現地の案内を有山源衛門がしています。元は9冊ありましたが、現在は1冊しか残っていません。この残った1冊の地名を見ると、「大栗はた」、「大栗」、「川はた」、「川ふち」、「ゑこた」、「いしなた」という地名が見え、大栗川沿いだということが分かります。さらに、「ゑこた」と「いしなた」は現在地がわかるので、それで大体の場所が分かります。それが右図になります。地図の中央に「有山」、北側に「ゑこた」「いしなた」があります。「ゑこた」は現在の聖蹟桜ヶ丘駅あたりです。この一帯が有山源衛門の案内でできる関戸郷と呼ばれる場所だったということがわかります。

同じ時期に、一ノ宮のほうでも検地がされていて、小野神社の周辺の地名も検地帳に記されています。一ノ宮の検地帳にあるということは、ここは関戸郷ではないということが分かります。

さらに、同じ年の「^{せきどのうちあげむらおんなわうちみずちょう}関戸之内上和田村御縄打水帳」では上和田村の地名が確認できます。有山源衛門が案内した関戸郷の残り8冊分は、この上和田村以外の部分になります。中河原の北側か、まだ検地帳が見つからない城山周辺の鎌倉街道表裏道沿いのあたりが残り8冊分の御縄打帳に記載されていた可能性が考えられます。



文禄3年検地帳に登場する地名の比定地



⑤戦国時代の六人百姓の拠点から考える

もう一つの手がかりは天正14年(1586)の「松田憲秀印判状写」です。当時関戸郷を治めていた又代官まただいぐんが逃げ出したことにより、現地の6人の百姓たちが関戸の年貢等を代わりに納めることが取り決められました。この6人は関戸郷内のそれぞれの有力者たちだった可能性があります。この人たちの根拠地を見てもみると、有山集落や宝泉院のある東寺方地区および乞田地区などになります。これらの場所から、先述の中河原が含まれるとすると、関戸郷は城山を中心として表裏の鎌倉街道沿いに広がっていたのではないかという推測ができます。

(2) 河川変動と揺らぐ関戸

関戸郷の範囲が広いということをお話しましたが、その範囲も一定ではなかったかもしれません。

城山の一角に、多摩市桜ヶ丘の寿徳寺というお寺がありますが、この寿徳寺の檀家には府中市の四ツ谷が含まれています。四ツ谷の伝承では、四ツ谷はかつて多摩川の南岸にあって、寿徳寺の檀家になったとされています。しかし、享保11年(1726)には寿徳寺から抜けて、自分たちが作った玉川寺ぎょくせんじというお寺に移りたいという訴訟も起きており、北岸に移っていたことがわかります。

四ツ谷村はいつごろ多摩川南岸にあったのかというと、青柳村が万治元年(1658)に洪水で流されて対岸(北岸)の四ツ谷村に借地したということが言われているので、それ以前と考えられます。寛永の初め(1624~)に一度、四ツ谷村が洪水によって流されて開墾しているということを記載した資料もあるので、こことところで南岸、北岸が変わったかもしれません。慶長元年くらいに変わった可能性もあるのですが、明確に分かりません。

国土地理院の「治水地形分類図」でこの付近を見てもみると、河川変動が何回も何回も起こっていたことが分かります。

『香蔵院珎祐記録』でも関戸郷の村の数が5ヶ村から6ヶ村に変動しています。『香蔵院珎祐記録』を見ると、中河原村を追加したいという希望や、鹿子嶋が押領されて年貢が出せないから関戸の4ヶ村と中河原村が年貢を出すということが書かれており、奪い合いみたいな事が行われているのが中河原と鹿子嶋のような気がしています。

天正13年(1585)の松田憲秀印判状では関戸郷の中河原の新宿開発が認められています。このことは開発できるだけの手付かずの土地が中河原にあったということの意味しています。ひょっとしたら水害等の被害後の可能性も考えられます。

これらのことから、関戸郷には「揺らぎがちな関戸」と「安定的な関戸」があり、河原に近い中河原、鹿子嶋、青柳、四ツ谷は水害や押領などで非常に揺れがちだったのではないかと推測されます。

■伝承の背景

(1) 関戸旧記

関戸合戦の伝承が文字として残されて私達に届いたのはいつからでしょうか。「横溝八郎の墓」や「安保入道の墓」というのが文字として登場するのは『関戸旧記』という関戸合戦から500年後の1800年代の史料です。この作者は相澤伴主という関戸の名主をつとめた人物で、当時の文化人であり、有名な『調布玉川惣画図ちようふたまがわそうがず』もプロデュースして作っています。

(2) 江戸時代の背景

どうして相澤伴主が江戸時代に『関戸旧記』を書いたのかということをお話したいと思います。岩橋清美氏・小野一之氏・釈迦堂光浩氏のご研究をもとにお話したいと思います。

背景の1つには江戸時代後半の流れというものがあります。江戸幕府では享和3年(1803)に各藩に地誌編さんを命じるなど、地誌を作っていくことを推進し、編さんが進められるようになりました。このような流れから、それぞれの町の名所旧跡を見つけていくことが常態化されていきました。関戸も『江



戸名所図会』という一種の地誌に描かれています。地域の名所に注目が当たって名所が生み出されていた時代というのが相澤伴主のいた 1830 年代、40 年代という時代なのです。

もう一つの背景には、『太平記』の流行があります。江戸時代になると、太平記読みというのが非常に流行したうえ、『たいへいきひょうばんひでんりじんしやう太平記評判秘伝理尽鈔』などにより、安保入道父子のことが美談に再編されます。相澤伴主が安保入道の墓を探すというのもこの安保入道への感情移入があったからという背景もあるのではないかと考えられています。

ほかにも、横溝八郎の墓を管理していた延命寺には、しゅんとうしやうにん春登上人という人がいて、『万葉用字格』という万葉集の辞書を出したり、『わらくくつ藁裏』という関戸やその他の歴史的なことをまとめた本を出したりしています。そのような歴史を調べる流行も当時はありました。

関戸合戦伝承が生み出された構造としては、まず事実としての関戸合戦がありますが、その後も関戸は戦場などになることが繰り返されて地域の人々の中に合戦の記憶というのが残ったと思われます。さらに江戸時代の地誌編さん、名所化の流行、『太平記』の流行も相澤伴主による『関戸旧記』の誕生につながるといえます。それが現在に伝えられているので、私たちが見ている関戸合戦の伝承というのは、中世から直に来るものではなくて、相澤伴主による再編を経たものを見ているということになります。

(3) 再び供養へ ～関戸合戦伝承に反映されるもの～

冒頭の観音寺の供養は、昭和 20 年代、30 年代に行われるようになりました。当時、働き盛りの方が早くに亡くなるが続いたようで、これは関戸合戦の戦没者の供養をしていないからではないかということが考えられて、供養が実施されたということです。何か悪いことがあったときに、関戸合戦の戦没者の供養をしていないからではと発想が行くところ

がやはり、地域性であると感じます。

地域の人々の合戦の記憶がこの供養につながっていたことを考えると、関戸合戦の伝承は、単に中世だけではなく、近世の文化人の活動、さらには交通・政治上の要衝であるという関戸の地域的な特色、そして地域で長く共有してきた記憶というものを見ることができないのではないかと思います。そこに関戸の地域性があるといえるのではないのでしょうか。

■おわりに 伝承を超えるために

関戸合戦の伝承というのは、当時の伝承を採録しただけでなく、伴主自身の見解も反映されています。そのため「中世」の検証においては伴主前と後の伝承を分けて考える必要があると思われます。

たとえば、安保入道の墓は、伴主によって自邸内の墳墓が候補地とされたものです。横溝八郎の墓は「八郎塚」として古老が伝えたものが採録されたものです。

また、文字史料で伴主以前に遡ることができるものもあります。旗巻塚の「旗巻（幟巻、畑まき）」という地名は寛政 8 年（1796）の関戸村の名寄帳に見えていますので、伴主が生まれる前から旗巻という地名があったことがわかります。このように伴主前と後をきちんと丁寧に史料を見て分けていくことも必要だろうと思います。

そうすることで、さらに関戸の歴史の手がかりがより多く見つけられるのではないかと思います。

質疑応答・意見交換

コメンテーター：橋場 万里子 氏
深澤 靖幸 氏
アドバイザー：小田 静夫 氏

【参加者】 関戸と呼ばれるのは中世以降と思いますが、以前はどのような地名だったのでしょうか。

【橋場】 関戸という地名は『曾我物語』真名本に初めて登場します。しかし別名である「吉富」という地名は鎌倉幕府の編さん物『吾妻鏡』の治承5年の4月20日条に登場しており、これが実質関戸の初出史料になります。それ以前にこの地域がどう呼ばれていたのかは分かりません。

【参加者】 関戸郷には関戸合戦当時、人口は何人ぐらいたったのでしょうか。

【橋場】 関戸村だけでは、江戸時代から明治時代に42～68軒でした。これに寺方、貝取、乞田などを加えると、200軒前後になります。中世はもう少し少なかったと考えられます。

【参加者】 四ツ谷村は1日で多摩川南岸から北岸に移動したのでしょうか。

【橋場】 大きな洪水があれば流路はすぐに変わると思います。1つの洪水で年間をかけて徐々に変わるとかではないと思います。

【深澤】 流路が確定するまでは多少時間がかかって、それが認知されないといけないのだと思います。そのため、1回洪水が起きて、川の瀬が向こうへ行ってしまうとしても、領有関係等が全て確定していくためにはある程度時間が必要かと思います。川の瀬は1日の大洪水で変わるかもしれませんが、皆さんに認知されるようになるのは、しばらく時間が必要なのかなと思っています。

【橋場】 青柳村が流されて府中側に移って、村が場所を移ったにもかかわらず、権利はまだ残っていて、それが訴訟になったという事例があります。そのように考えると、権利が変化していくのは非常に時間がかかるのだと思います。

【参加者】 鹿子嶋という苗字で「カゴシマ」さんがいます。

【橋場】 鹿子嶋と読んだのですが、もしかしたら当事は「カゴシマ」や他の読み方で呼んでいた可能性

もあります。読み方、場所も含めて、不明なことが多いです。

【参加者】 青柳という苗字は川沿いに見られます。府中や境川、川沿いに生えているからですか。

【橋場】 府中に青柳が残っていたり、国立市に青柳という住所があったりしますが、もともと多摩市の一宮のそばに青柳村というのがあって、それが流されて府中の四ツ谷あたりに間借りして、現在の国立の場所に移ったという伝承があるので、それは同じ青柳のことだと思います。移ったから名前が残っている可能性はあります。

【深澤】 確定ではないですが、平安時代につくられた『和名抄』、百科事典の中に武蔵国多摩郡の郷の名前として小楊郷というのが出てきます。この場所は分からないのですが、1つの推定として、近世に見られる青柳につながっているのだという考え方が古くから提示されています。この説が正しいならば青柳ではなく、小楊ということになるのかと思います。

【参加者】 一ノ宮は日野にもありますが、大宮が一宮だと思っていました。真の一宮はどこですか。

【橋場】 一ノ宮は日野市に接していますが、住所としては現在の多摩市になります。大宮と多摩の小野神社とどこが一宮かという話ですが、古い一宮は小野神社のほうではないかと言われています。大宮氷川神社が一宮と言われはじめるのが戦国末から近世にかけてです。一宮という制度はそれ以前の11世紀ぐらいからできており、この頃の一宮は国府に近い小野神社だったというふうに考えられています。一宮が、途中で変わっていったのです。

【参加者】 『関戸旧記』の伴主のフィルターを通した関戸合戦と、史実として存在した合戦像と区別していくにあたって、中・近世期における合戦の記録を示す史料は存在しているのでしょうか。

【橋場】 今のところ、伴主の『関戸旧記』が関戸についての伝承を採録したものです。太田南畝などが多摩川を回って話を聞いて『調布日記』などを書いているのですが、それに答えているのが相澤氏なの



で、そのあたりの時代のものとしては大体同じような伝承が採録されていることになります。それ以前の伝承を採録したものはあまりないと思いますが、神社の由緒書などに登場することもありますし、もう少し探していきたいと思います。一次史料のほかは、『太平記』などの軍記物語にあることは先述のとおりです。

【参加者】 関戸合戦とは激しい戦闘が展開されたものだったのでしょうか。

【橋場】 『太平記』の記述を見ると、かなり激しいと思われますし、状況的にも分倍河原で最後合戦があって、そこから負けていく幕府軍を追っていく戦いだったので、激しい掃討戦があったのではないかという推測はできます。

【深澤】 板碑という視点で見れば、1333年の年に板碑の造立が増えるかといえば、そういうわけではないので、合戦が行われてたくさんの戦死者が出たからといって、その場で供養するという行為が頻繁に行われたとは考えにくいということがまず1つあります。

ただし、分倍河原・関戸合戦における戦死者、あるいはこの一連の合戦、新田義貞の鎌倉攻めという意味での一連の合戦における戦死者を供養した板碑という意味では、特徴的なものがいくつか残されています。1つは、徳蔵寺の板碑です。これは合戦のモニュメントと言っても良いくらい象徴的な存在で、軍忠状を板碑にしたようだとされています。このような象徴的な板碑が作られていることからすると、この合戦が大きなインパクトをもって当時の人々に受け止められて、死んだ身内の人々の供養しなければいけないという強い意識が働いて、大きな目立つモニュメントのような板碑を作っていくことがあったのは確かだと思います。

どういふ大きさのどんな被害があった合戦なのかは軍記物の記述と軍忠状というような話でしたが、軍忠状の書かれている事実をさらに膨らませてくれるのが、板碑の特徴的な存在とか、陣僧が付き従っ

て恐らく供養をしてくれたのだらうと、そこまでは想像していい範囲なのかなと思います。

【参加者】 鎌倉と武蔵国衙の中継点ということが政治・交通上の関戸の重要性という話であったが、そもそも鎌倉時代において武蔵国衙がどの程度重要であったかがわからない。

【深澤】 古代国府が置かれた場所が中世の段階で府中と呼ばれるようになりました。東京の府中の場合は、古代に国府が置かれ、中世以降もずっと政治拠点であり続け、古代以来国府の場所がほとんど動かない都市という意味で、珍しい歴史的継承の際立った都市だと思います。

中世にどんな重要性があるかと言うと東京の府中一武蔵府中の場合は鎌倉幕府のお膝元のような位置づけになります。鎌倉幕府の出先機関のように位置づけられ機能した府中というところが他の国々の府中と違うところではないかだと思います。それとともに鎌倉を取り巻く重要拠点として位置づけられていくのだと思います。

そういった際に大きなポイントとなるのは鎌倉街道であって、鎌倉街道は鎌倉から上州、信州へつながる道として敷設されましたが、この経由地点に府中が選ばれているのです。鎌倉から北上してどこで多摩川を渡るかとか、いろいろなことが考えられると思うのですが、政治的な拠点である府中を通過せねばいけないという意識はとても強く重要視された場所なのだろうと思います。その後、戦場やその通過地点になっているということからも府中は軍事性、政治性が高い場所であると理解できます。

■考古学的視点から「落川・一の宮遺跡について」

【小田】 多摩ニュータウンの建設時に分布調査を行った際、非常に珍しい遺跡が関戸の北側に面した低湿地帯にありました。その遺跡が落川・一の宮遺跡です。多摩市と日野市にまたがる75万ヘクタールという大規模な遺跡です。そこで発掘調査を行った結果、様々なことが分かりました。古墳時代に大集落が形成されるのです。関戸は多摩川を上ってきて、



津の場所にあるのです。そして、河川が氾濫することを考えると、低いところで生活するためには、大変な土木技術が必要です。土木作業もでき、古墳を作れるぐらいの知識をもった人たちというのは、日本人たちではないのです。韓半島から渡ってきた外国の知識人、職業集団が落川と一宮遺跡に最初に上陸して、大規模な集落を作ったのです。

それが延々と鎌倉時代まで続いて、1333年の関戸合戦でこの集落は一気に消滅したのです。

この遺跡ではどんな作業をしていたかという、まず鳥を捕まえて飼っていました。その飼っている小鳥を猛禽類に食べさせて育てていたのです。タカやトンビは羽が矢羽根になったので、弓矢の材料としてそれを飼育していたわけです。

あとは牛を飼っていました。牛の墓がたくさんあるわけですが、発掘すると首や胴体がなく、骨がバラバラの状態でした。ここで、牛馬の皮なめしに使用する磨石状の石器が見つかりました。この石器で牛や何かの骨をたたくと、中には髄液があり、これで牛や何かの皮をはいではなめすのです。なめした皮は甲冑の武具を作るのに使用しました。

そういう職能集団が何百人、何千人と落川と一の宮にいたのです。このため、関戸合戦などといった戦があると、そういう道具はいくらでも作れました。そういう場所は多摩川のずっと下流から上流まで調べていってもどこにもないのです。戦争のたびにそういう道具を全部調達した集団がいたということで、関戸という場所はそのような意味で多摩川の歴史にとって大切な場所だったということが考古学史料から言えます。

■まとめ：多摩川と関戸の歴史

—相澤伴主を例に

【橋場】岩橋清美氏や宮森徳也氏のご研究に詳しいですが、相澤伴主は、名主であり、允中流いんちゅうりゅうという華道の流派を創始した方ですが、お父さんの相澤ごりゅう五流という人物は多摩郡で初めて法眼ほうげんという位を得た絵師なのです。息子の伴主も袁中郎流えんちゅうろうりゅうという生

け花の流派を学び、多摩郡の人たちを取りまとめるような立場になって、初めて多摩地域で生け花の流派を創始して、大きなネットワークを作っていました。

今回ほとんど触れていませんが、『調布玉川惣画図』にせよ、『関戸旧記』にせよ、そのようなネットワークの中で作られていったものなので、伴主の業績は、文化活動を多摩で活発化させたということと、それぞれの地域の名主さんたちとネットワークを結んで広く活性化させていったということにあると思います。

『調布玉川惣画図』については、単に多摩川を描いたというよりは、伴主が源流はどこかという疑問をもとに探索して、自分のなりの説を出して、ここが源流だということを描いた、伴主の成果発表のものともいえます。

また、伴主の相澤家が栄えたのはおじいさんやひいおじいさんの代で、山林資源いけだしや筏師としての収入があった可能性があるという指摘もあります。

そのようなことから、相澤伴主は多摩川と非常につながりがある人といえると思います。



橋場 万里子 氏 プロフィール



- ・公益財団法人多摩市文化振興財団（パルテノン多摩歴史ミュージアム）学芸員
 - ・首都大学東京、東京医療学院大学非常勤講師
 - ・お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士前期課程終了
- 専攻は日本中世史。現職では、地域史全般を担当。担当展示は「武蔵国一之宮」、
「関戸合戦」、「多摩・商店ことはじめ」、「鍛冶屋のあゆんだ幕末・明治」など。
現在、担当した特別展「災害と多摩」を開催中。

総司会・開会挨拶：神谷 博（多摩川流域懇談会運営委員長）



多摩川流域懇談会は、平成 10 年パートナーシップ出始めるいい川づくりを具体化するための組織としてスタートしました。その中でも様々な部会があるのですが、3 年前から歴史部会が始まりました。今回の流域歴史セミナーは中世第 2 回目の講演です。今後は近世から現代に入っていくということで、全体で 3 回ずつ 9 回シリーズを予定しています。今日はプログラムにもありますとおり、「関戸合戦と関戸の地域性」ということをテーマに、多摩市の学芸員さんの橋場さんのお話を伺います。

会場からの挨拶：伊東順一（公益財団法人多摩市文化振興財団事業課長）



10 年前に私どものほうで「関戸合戦」というタイトルの特別展を開催しました。現在でも非常に多くの方の関心が高く、市内の近隣の公民館等から、今でもこのテーマで話をしたいというリクエストがあります。それから、現在は「災害と多摩」という特別展を実施しております。これは多摩川ととても関係の深いテーマでございまして、これも橋場が担当しました。来年の 3 月には、多摩ニュータウンと千里ニュータウンという日本を代表する 2 つのニュータウンを取り上げた特別展示を橋場が担当して行う予定になっています。その際はぜひご覧いただければと思いますので、よろしくお願ひします。

まとめ：深澤靖幸（府中郷土の森博物館学芸係長）



私どもの博物館でも、同じようなテーマで二十数年前に「合戦伝説」という特別展を行いました。それは府中なので「分倍河原合戦」といいますが、それを史実だけではなくてその後の伝説の部分も含めて取り上げて展示したもので、当時としては中世史の研究者も興味を引いたのかなと思っています。橋場さんの行われた関戸合戦は、確実にその上を行っていて、現代につながる伝承まで含めて取り上げて、全体像を提示しているというところに面白さがあったのではないかと思います。そうした話を今日は橋場さんの解説でわかりやすく聞けて良かったです。

まとめ：小田静夫（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）



私は分倍河原の合戦という名前は知っていましたが、関戸合戦という名前を知りませんでした。しかし、これからは関戸合戦のほうが有名になっていただきたいですね。最近、関戸という場所が本当に広い範囲だということが古文書で分かってきたので、考古学的にはこの地域の 1 つの中心地だったのではないかと思います。そういうところの庶民の人たちの生活と、武士が鎌倉とどうつながっていたかとかという古文書とそういうような歴史をまとめると、今度は関戸という名前のほうが分倍河原に勝つかもしいないので、それを楽しみにしてまた頑張ってください。

閉会挨拶：竹本（国土交通省京浜河川事務所副所長）



我々河川事務所では、流域の市民や企業、学識者、行政と一緒に多摩川のいい川づくりを進めていく取り組みをしております。いい川づくりのためには多摩川らしさとはどのようなものかということを知ることが大事であり、そのために様々な流域の歴史を学んでいこうとするのがこの流域歴史セミナーです。このような取り組みにより、行政と市民が一体となっていく川づくりの輪がどんどん広がっていければと思います。

実は多摩川の河川改修が始まって来年で 100 年になります。100 年に向けて皆さんと一緒に実施できる楽しい取り組みを考えていこうと思っていますので、ぜひ参加していただければと思います。本日はありがとうございました。

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。

第5回多摩川流域歴史セミナー

◇開催日 平成29年6月10日(土)

◇開催内容

『関戸合戦と関戸の地域性』

◇講演者 橋場万里子氏

◆講演者プロフィール

- ・公益財団法人多摩市文化振興財団(パルテノン多摩歴史ミュージアム)学芸員
- ・首都大学東京、東京医療学院大学非常勤講師
- ・お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程修了
専攻は日本中世史。現職では地域史全般を担当。



表面 各回の歴史セミナー概要を掲載

第5回多摩川流域歴史セミナー会場 パルテノン多摩

◇所在地
東京都多摩市落合2-35

◇展示概要

年間を通して、コンサートや演劇、企画展、講座など多彩な催し物を行っています。大・小ホールをはじめ、会議室やギャラリーなどの貸し出しもしています。また、世界的にも貴重な「自動演奏楽器」のあるマジックサウンドルームや、多摩の歴史を展示している歴史ミュージアムといったコーナーもあります。



多摩川流域歴史セミナー
ホームページへのアクセス
はこちらから→



裏面 会場となる博物館情報を掲載

第5回多摩川流域歴史セミナー『関戸合戦と関戸の地域性』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

